

今日もあなたのそばに。明日もあなたのために。

# デュポン通信

2015.6  
Vol.39

## キスジノミハムシ(キスジトビハムシ)

【コウチュウ目 ハムシ科】 *Phyllotreta striolata* (Fabricius)

**加害作物** アブラナ科

**発生・形態・被害**

成虫は名前の通り黒地に黄色いストライプの入った、3mmほどのよく跳ねる甲虫である。アブラナ科、特にだいこんを好み、成虫は葉に丸い1mmほどの穴をあけて食害する。幼虫は地下に棲み、根の表面を食い荒らすため、発生が多いと全く商品価値が無くなる。生育初期から発生が多い場合は、成虫および幼虫の加害によりほとんど株が無くなることもある。常発地では、播種時の土壌処理剤と生育後期の散布剤による防除が欠かせない。



## 初期の防除がポイント、だいこんのキスジノミハムシ対策

### 1 なぜ夏場のだいこんの被害が著しいのか？

気温が高くなってきますとキスジノミハムシの飛来数が急に増加します。雌1頭あたりの産卵数は150~200個といわれ、25℃の条件下では卵から成虫まで1ヶ月以内で成長します。株元に産み付けられた卵は6日程度で孵化し、餌となるだいこんの根を追って土中へと進入していきます。1頭あたりの数多い産卵数と1ヵ月後には次世代が再度、加害する可能性があり、そこが本害虫の防除を難しくしている理由です。



### 2 スタートが肝心。

特に夏季のだいこん栽培はキスジノミハムシの密度が高くなり、作物の生育初期から加害するので、播種時の粒剤処理といった初期防除の徹底が、健全なだいこん作りの上で重要になります。粒剤の残効で初期に狙われる細根を保護し、最も加害されやすい播種後1ヶ月前後の若いだいこんを守ります。

### 3 成虫対策も怠らない。

高温期に連続的に飛来する成虫は1頭あたり多くの卵を産むので、次世代の密度を高めないために散布剤による早めの成虫対策も必要です。気温が25℃以上になると1世代の日数も短くなるので、細心の対応を払って散布剤による幼虫の土中侵入を抑制してください。

**適用薬剤** デュポン™プリロッソ®粒剤 詳しくはこちらをご覧ください。 <http://ag.dupont.jp>